＜『アジア・アフリカ研究』61（2）2021年4月刊行に所収＞

**アラブの春は西クルディスタンで花開いたか？**

**――シリア内戦におけるロジャヴァ革命研究のために**

**岡野内　正**

Ⅰ　はじめに――アラブの春は西クルディスタンで花開いたか？

Ⅱ　南クルディスタンで色あせる花――クルド・ナショナリストの夢と現実

Ⅲ　北クルディスタンに咲くあだ花？――PKKをどう見るか

Ⅳ　「あいまいな革命」論が覆う西クルディスタンの花

Ⅴ　おわりに――花を結実させ、種を散らすために

**Ⅰ　はじめに――アラブの春は西クルディスタンで花開いたか？**

**＜アラブの春は混乱とイスラム国（IS）を生んだだけか？＞**

　2010年末からチュニジアで始まり、2011年に入ってほぼ全アラブ諸国に拡大したアラブ諸国の民主化運動、いわゆる「アラブの春」からほぼ10年になる。10年たってこの民主化運動を振り返れば、それはむしろこの地域に混乱をもたらしたかのように見える。

いささかなりとも民主化の進んだ政権が成立したのはチュニジアのみであり、大きな変化の兆しが見えたエジプトやバハレーンでも民主化運動は抑え込まれ、リビア、イエメン、シリアでは凄惨な内戦となって大量の死者と難民が生み出され、近隣諸国や大国による足並みのそろわない軍事介入によって、いまだに平和的解決の見通しさえ立っていない。2019年になってアルジェリア、レバノン、スーダンで「第二のアラブの春」と呼ばれる動きが現れたが、先行きは不透明だ。しかもアラブの春の優等生チュニジアでさえ、民主化後の新政権は大量の若年失業者問題を解決できず、数千名の若者がいわゆるイスラム国（IS）志願兵として国を後にしたと推定されている（山中2019）。

そのISは、アメリカ軍によるイラク全土の占領後に押し付けられた「民主化」＝「イラクの歪んだ春」、さらに、非暴力の民衆的「アラブの春」を押しつぶそうとする独裁政権側の暴力的対応が生み出した武装勢力の割拠状態と言うべきシリアやリビアの内戦で育った暴力的な新しい独裁国家樹立運動であり、イスラーム教主流派の解釈とは異なる反人権・反民主主義の理念を明確に掲げていた。シリアとイラクで領土を維持したISはほぼ壊滅したが、その火種はあちこちに残っている。アラブの春は中東に混乱とISを生み出しただけだったのだろうか？

**＜アラブの春を含む世界的な民主化運動の高揚と挫折＞**

IS志願兵は民主化運動に絶望したアラブ諸国の若者だけでなく、2008年の世界金融恐慌後の失業問題に苦しむ欧米やロシア（チェチェン）や中国（ウイグル自治区）などを含む世界各地から、それぞれの地域での民主化運動に絶望して、「集団本位的な自殺」（デュルケーム）を望む若者たちを惹きつけた。したがって、IS現象を考察するには、アラブの春だけでなく、それと並行して同じ2011年に欧米などでも高揚したウォール街占拠運動のような世界的な民主化運動の拡大――その中には日本の反原発国会議事堂包囲デモも含まれる――を視野に入れねばならない。

いやむしろ、アラブの春現象を、新自由主義を公認の教義とする少数の金融機関を中心とするグローバル資本主義の世界秩序に対するグローバルな異議申し立て運動の一環として理解せねばならないだろう。筆者は、2015年の国連総会が全会一致で採択してエコロジカル・ヒューマニズムの発想にそって「世界をすっかり変える」ことを宣言した『アジェンダ2030』とそれに沿った国連主導のグローバルな社会運動の様相を呈しつつあるSDGs達成運動の展開には、2011年以来の世界的民主化運動が反響していると考えている。（その独自な様相について岡野内2020および岡野内2021を参照されたい。）

　アラブの春とウォール街占拠運動を包含する2011年の世界的な民主化運動は、現存の仕組みに対する異議申し立て運動ではあったが、現存のグローバル資本主義とは別の仕組みの実現を具体的に明確に迫る運動ではなかった。現存の仕組みを破壊し、その後に組み立てる仕組みの簡明なビジョンを示した反民主化のIS運動はそこに付け入って拡大した。世界的な民主化運動に共感を寄せる理論家たちは、新自由主義的グローバル化にとって替わる新しい仕組みに関する具体的なビジョンが掲げられないまま沸き起こる運動の弱点に気づいてはいたが、「大衆をつかんで物質的な力となる理念」（マルクス）によって新しい仕組みへの組み換えに至るくさびを打ち込むことができないまま、運動は下火になっていった。2021年初頭の合衆国議会襲撃事件で頂点に達するアメリカのトランプ支持者たちによる大統領選挙結果と政権移行手続きを否定する反民主化運動の拡大と暴力化は、IS運動と同様に、民主化運動の弱点に付け入るように増殖したものと言えよう。

**＜注目されるシリア内戦下のロジャヴァ革命＞**

　ウォール街占拠運動が掲げたスローガン「99%の反乱」は、ロンドン大学で教える人類学者であると同時に「国家に抗する社会」の強化を模索するネオ・アナーキズムの思想家・活動家でもあるデイヴィッド・グレーバーが占拠運動の活動家たちとともに考案したという。（Cain 2020）数冊の主著の日本語訳によってすでに著名なグレーバーを始め、グローバル資本主義の批判に取り組み、それに替わる人類社会の仕組みについて考察してきた著名な理論家たちが、アラブの春以後の世界的な民主化運動の中で、ある社会革命の動きに注目している。それには、メキシコの大学で哲学を教えつつ、チアパスの先住民族運動を始めラテンアメリカの運動に深くかかわってきたジョン・ホロウェイ、さらに世界的ベストセラー『帝国』の著者でありイタリアとアメリカの大学で哲学を教えるネグリとハート、さらに「世界システム論」の社会学者イマヌエル・ウォーラースタインらも含まれている。（これらの理論家たちが寄稿したInternational Initiative ‘Freedom for Abdullah Öcalan- Peace In Kurdistan’ (2020)を参照）

　それは、シリア、トルコ、イラク、イラン、アルメニアなどにまたがるクルド人の地を意味するクルディスタンの中では西部となるためにクルド語でロジャヴァすなわち西クルディスタンと呼ばれる地域で、シリア内戦の中から生まれた社会革命であり、しばしばロジャヴァ革命と呼ばれている。

**＜ロジャヴァ革命論に関するグレーバーの観察＞**

　ロジャヴァ革命についてグレーバーは次のように言う。彼を含む多くの人々が、「直接民主主義と協同組合経済とエコロジーの真剣な実践を志向する民衆運動が、もっとも権威主義的で未開と言われてきた世界のこの場所で出現したことを知って非常に驚愕し、……何千もの武装した女性解放論者が家父長制社会の軍を戦場で敗退させるのを目撃して、やはり驚愕し感動した」。（Graeber 2016=2020: 15）「わずか一週間ほどの」ロジャヴァ訪問ではあったが、「私は、大衆を革命的に動員する場合にめったにないようなシナリオ、そしてほとんど最善のシナリオを目撃していた」として次のように書く。

　　支配階級は結局ほとんど逃げ出し、政府は自ら解散して、事務所やコンピューターやファイルや拷問道具をきれいに片づけた。もっとも重要な建物や工場や耕作地はすでに正式な公共財産であった。……もちろん他の点では、最悪といっていい事情が存在した。ロジャヴァは完全な禁輸状態におかれ、敵対勢力に全面的に包囲されていた。ロジャヴァを破壊するためにならなんでもやりかねないトルコ政府、同盟者であるトルコを喜ばせるために、シリアの同族クルド人から必需品の医療物資すら奪い取ろうとするイラクでの右翼クルド人政府、秘密警察の権力を再興するための好機を待つバース党政府、ロジャヴァを排除すると決めた反乱軍同盟、ロジャヴァを征服するためにすべてを思い通りにしようとするイスラム国、自らの目的に合致する限りでのみイスラム国と戦い、ロジャヴァの勇気と犠牲を利用しようとするアメリカとロシア、この両国はその上でロジャヴァを背後から即座に突き刺すのは周知のことだ。……こうしたことのすべてに関わらず、ロジャヴァが生き残り、成功し、そして成長すらしたという事実は、革命的状況の中で解き放たれたエネルギー、勇気、創造性、そして本当の人間の叡智が発現された証明である。（Graeber 2016=2020: 19-20）

　この革命を主導した「クルド人の自由を求める運動」については、次のように言う。

　　新しい思想、議論、実践の寄せ集めが、旧タイプのマルクス主義の教義と論争にとって代わった。独立したクルド人の国家を要求するのではなく、国家の概念そのものが拒絶され、アメリカ人の無政府主義者でソーシャル・エコロジストのマレイ・ブクチンの思想、他の著作家たち、クルド人の伝統、革命組織の広範囲にわたる実践経験、これらの統合に基づく民主主義的連合主義（democratic confederalism）の原理が受容された。（Graeber 2016=2020: 17-18）

**＜ハートとネグリによる非主権的制度の探求とロジャヴァ革命＞**

このようなロジャヴァ革命の運動側の論理については、2011年以後の世界的な民主化運動について、『帝国』や『マルチチュード』論の延長上で考察したハートとネグリの『集い（Assembly）』（Hardt ＆Negri 2017）も注目している。それは、「指導性の問題」と題された第1部の第3章「反ルソー論――主権概念を終わらせるために」の中で、「代表制批判」「構成的権力批判」に続く、「第二の呼びかけ――非主権的制度を発明せよ」という見出しのもとに登場する。そこではまず、ルーマンの社会システム論を受け継ぐトイプナーのオートポイエーシス的グローバル・ガヴァナンス論がまだ主権概念にとらわれていると批判した上で、脱植民地化の理論家の中から主権概念を超える試みとして、20世紀半ばのアフリカ独立運動の中でエメ・セザールとレオポルド・サンゴールによる民族自決と国家主権を切り離そうとする試みがあったことが紹介される。続いて「今日のクルド解放運動は同じく非主権的な脱植民地化を提起している」として次のように書く。

　　1990年代になってアブドゥッラー・オジャランは、運動の目標を民族解放（そして主権獲得）から「民主的自己決定（democratic autonomy）」に移すことを訴えてきた。ナザン・ユステュンダーによれば、オジャランは、「今日の文明の三つの害悪は、国民国家、資本主義、家父長制である。これらがいっしょになって、『資本主義近代』が組み立てられている。民主的自己決定のねらいは、資本主義近代に滅ぼされた、政治的で道徳的な社会を再生することだ」としている。ロジャヴァ（シリアのクルド人地域）での今日の政治的な実験は、脱植民地的な民主的自己決定がどのようなものとなるかの手がかりとなっている。（Hardt ＆Negri 2017：39）

なおここでハートとネグリが依拠するのは、当時トルコのイスタンブルの大学で社会学を教えていたが2018年からドイツに亡命しているナザン・ユステュンダーがアメリカの大学の雑誌に寄稿した「ロジャヴァにおける革命的実践としての自己防衛、あるいは国家の壊し方」（Üstündağ 2016）という印象的なタイトルの英語論文であるが、上記引用につけられた注ではさらに同じ方向のタイトルを持つ三つの英語論文の参照が求められており、ロジャヴァ革命がまさしくハートとネグリが探究する関心に沿って注目を集めていたことがわかる。

**＜世界的な民主化運動の混迷とロジャヴァ革命への期待＞**

2011年以降の世界的な民主化運動は、①いわゆる先進諸国での自由だが腐敗し形骸化した代議制民主主義の政治を変える、②いわゆる後進諸国での自由のない腐敗した代議制民主主義の独裁政治を変える、そして③ソ連などが歩んだ自由のない腐敗した国家的社会主義の政治とは違う道を歩む、という三つの目標を同時に追及した。ウォール街占拠運動などが①を、アラブの春は②を追及したが、いずれも③の具体像を示すことができずに世界的な民主化運動が混迷している。

そんなときに、②を追及するシリア北部のクルディスタンから③を具体的に掲げて①②の追求も同時に実践する動きが現れた。それが、ロジャヴァ革命だったというのである。しかもその見通しは、「国民国家、資本主義、家父長制」の組み合わせを三つの害悪として明確にしたうえで崩すことであり、そのために、エスニック・マイノリティ差別や女性差別に対抗できるように組織される多様な小規模コミュニティが主体となって銃で武装する自己防衛組織とその相互の連帯を通じての「直接民主主義と協同組合経済とエコロジー」が真剣に実践されているというのである。

　このように、ロジャヴァ革命は世界的な民主化運動、さらにその一環としてのアラブの春の混迷の中からシリア北部の西クルディスタンで奇跡的に咲いた花として、世界的に注目を集めている。だが日本ではそれほどの注目を浴びてこなかったように思う。

とはいえ2019年あたりからようやくクルド人やクルディスタン関係の書物（山口編2019およびその文献目録を参照）、さらにロジャヴァ革命に関する研究や手記の翻訳（Knapp, et al. 2016=2020, Cudi 2019=2019）が出版され始めており、その実情について各方面から研究する条件が整ってきたかにみえる。ただし、ロジャヴァ革命については、中東研究者の間でさえ、あまり知られていないばかりか、むしろ注目されていないように見える。それにはやや込み入った事情があるようにも思われるので、その理由についての考察も含め、以下、ロジャヴァ革命を考察する意義、そして最近のロジャヴァ革命関連文献について若干のコメントを加え、今後の研究発展に寄与したい。

**Ⅱ　南クルディスタンで色あせる花――クルド・ナショナリストの夢と現実**

**＜国なき民族の年代記＞**

　ロジャヴァ革命について考えるには、クルド人とクルディスタンについてのイメージを持つ必要があるだろう。そこで最初に、日本の読売新聞記者の独自取材によるイラク北部のクルディスタン（南クルディスタン）の現状と歴史に関する優れた記録、『クルド人　国なき民族の年代記――老作家と息子が生きた時代』（福島2017）を紹介し、コメントしておこう。

それは、2007年から2010年までのカイロ特派員時代のイラク北部とトルコ南東部への計10回の取材、2014年9月のイラク北部のスライマーニーヤ訪問に基づいて書かれ、2017年6月に出版されたものだ。（福島2017：211）その柱は、1936年スライマーニーヤ生まれのクルド語（ソラーニー方言）文学の小説家フセイン・アーリフからの聞き書きである。

この小説家は、湾岸戦争後の1992年にアメリカ軍などの後ろ盾によってイラク北部で成立したクルド地域政府の初代議員（クルド愛国者同盟（PUK）所属）となり、1994年には議会内の対立政党であるクルド民主党（KDP）が引き入れたサッダーム・フセイン政権のイラク共和国軍の侵攻によって命からがら議事堂を追われる経験をした政治家でもある。クルド人差別に反発し、イラク王国時代にすでに12歳にしてイラク共産党の活動に参加して投獄されて以後、2014年までのイラク現代史の波乱万丈を生きてきた作家の体験談は、文句なくおもしろい。同書は、第一次大戦後にイラク領とされたクルディスタンのクルド人の語りによってこの地域の現代史を描く優れた資料となっている。

　しかし、同書の柱となる物語を提供した作家フセイン・アーリフは、国民国家の樹立に社会問題解決の鍵を見出し、情熱を注ぐ強烈なナショナリストである。同書の帯には、「自由と独立を求め続ける『国を持たない最大の民族』――『国民的』作家フセイン・アーリフと、その息子マツダが語る、クルド人の歴史と今」とあり、タイトルでも「国なき民族」が強調されている。そして同書末尾では、さしあたりイラク領のクルディスタンで「小クルド国家」を独立させ、やがてイラン、トルコ、シリアのクルディスタンを含めた「大クルド国家」を樹立する、というその作家が語るクルド・ナショナリズムの夢と戦略が紹介されている。したがって、同書は、クルド・ナショナリズムを基調としたイラクのクルド人の物語として読める。

**＜クルド・ナショナリズムの限界＞**

　だが、同書のおもしろさは、あらゆる問題解決を民族自決＝国家樹立に流し込むクルド・ナショナリズムの物語を揺るがすような不協和音が、しっかりと配置されていることだ。同書には、老小説家の語りだけでなく、その息子や息子の友人の世代の語り、さらに同書著者の観察も書き込まれている。それは、ジェンダー、階級、エスニシティの視点から注目すべきものだ。

　第一に、クルドの伝統的な家父長制的規範に反抗する少女たちの自殺が多発していることが記されている。「クルド人の女性ジャーナリストの調査によると、女性の焼身自殺は湾岸戦争が起きた1991年に２人だけだったが、1998年に50人に上り、イラク戦争後の2006年には133人と一気に増えた」（福島2017：50）。さらにスライマーニーヤの女性人権団体「クルド女性同盟」によると、「2007年だけで207人の女性が焼身自殺を図った。そのうち、118人が20歳以下の少女たちだ。動機は、異性との交際を家族にとがめられるなど男女関係を巡るものがほとんどだ」（同上）という。「血縁を中心とした部族主体のクルド社会は保守的で、結婚前の交際は許されない。父親の威厳は絶大で、『不貞な行為』を犯した娘を父親が一家の名誉を守るために殺す『名誉殺人』も横行している」（同上）。ナショナリストの夢を実現した地域政府樹立によるサッダーム・フセイン政権支配からのクルド民族の解放は、女性、とりわけ少女たちにとっては解放でもなんでもなかった。家父長制からの解放を求める少女たちのエネルギーは沸騰しているが、今は自分たちの命を絶つ方向に向けられている。

　第二に、イラク北部の油田地帯をかかえ、石油輸出によって潤うようになったクルド地域政府の行政機関は腐敗し、複数政党制の自由選挙による代議制民主主義の仕組みが、クルド自治地域内部での富裕階級による貧民階級支配の手段となりつつあることを描いていることだ。二大政党の一つPUKの議員でもあった老作家の息子は、薄給でPUKの通訳を務めていたが、政党政治の腐敗に嫌気がさしてPUKを離れて事業を始めた。二大政党制を打破する新政党の結成にも関与したものの、開発を見越した土地の転売や翻訳会社などの事業の成功とともに、トルコのリゾート地に別荘を購入し、クルディスタンの政治から距離を置くようになる。さらに、貧困家庭に生まれたその友人のクルド人ジャーナリストは、地域政府成立後には政党政治の腐敗追及に情熱を燃やし、この地域の新聞の中では唯一の独立系メディアの創業者にも加わったが、ついに政党系のメディアに高給で引き抜かれてアメリカ特派員となり、クルディスタンの政治腐敗や社会問題の追及からは距離を置くようになってしまう。（福島2017：203-205）クルド民族の解放を実現するはずの地域政府樹立は、クルド人内部の少数の富裕層だけを解放し、大多数の貧困層の解放を実現できていない。

　第三に、差別を受けてきたクルド人たちが多数派となって地域政府を形成したとたんに引き起こした、この地域でのエスニックな少数派への衝撃的な差別事件を描いていることだ。先述のクルド人ジャーナリストは、独立系メディアの記者として2008年にキルクークでクルド人のデモを取材中に、そのデモを狙うIS戦士によるとみられる自爆テロに遭遇した。25人が死亡、100人以上が重軽傷を負うテロに興奮したクルド人のデモ参加者たちは、テロ現場の近くにあったトルクメン人政党事務所を「トルクメン人の仕業だ」と叫びながら焼き討ちにした。その政党の政治家が数日前にクルド人批判の発言をしたことが報道されていたからだ。その記者は焼き討ち現場の取材中に、興奮したクルド人群衆の一人から「こいつはトルクメン人のスパイだ」叫ばれ、袋叩きされ、頭などに瀕死の重症を負ったのである。（福島2017：61-64）地域政府樹立によるクルド民族の解放は、少数派民族を含む全民族集団の解放とはならず、むしろ少数派となった他民族への新しい抑圧となりうることを痛切に示す事件である。

**＜南クルディスタンで色あせる花＞**

　かくてイラク領の南クルディスタンに関する同書の読者は、この地のクルド・ナショナリストの語りを通じて貴重な史実を手にしながらも、民族自決を実現するクルド国家樹立への道の険しさと、国家樹立という目標そのものの妥当性への疑いを抱き、立ちすくむだろう。2014年9月のインタビューによる老作家の息子の次のことばは、そのような閉塞感をみごとに示す。

　　もちろんクルド人国家は必要だし、その日を夢見ている。しかし国際社会の現実を見た時、容易にクルド人の国家の樹立ができるとは私には思えない。クルド自治区の独立を米国は容認しないだろうし、トルコ、イランは武力を使って邪魔をしてくるだろう。国家樹立に携わるのは男のロマンだが、それに自分の人生をささげるのは、私はごめんだ。（福島2017：204）

はたして同書が出版された直後の2017年9月には、KDPが主導権を握る地域政府が、議会の手続きを経ないで拙速にイラク領クルディスタンの独立を問う住民投票を行ない、92%強の独立賛成票を得た（投票率は72%）が、同年11月にはイラク連邦最高裁によって住民投票じたいが無効とされてしまう。そうなるまでイラク領クルディスタンの独立が自国領クルディスタンの独立に波及することを恐れるイランとトルコはそれぞれ国境地帯で軍事演習を行って圧力をかけ、イラク連邦政府は住民投票の撤回を求めて経済制裁をするとともに軍を派遣してこの地域全体を制圧し、アメリカはそれを黙認した。クルド地域政府の軍隊ペシュメルガとイラク連邦軍の衝突はなかったが、国連調べで18万人の国内避難民を出すまでになった。（勝又2019）

**Ⅲ　北クルディスタンに咲くあだ花？――PKKをどう見るか**

**＜トルコ領クルディスタンと左派武装勢力PKK＞**

ところで、同書には、北クルディスタンとも呼ばれるトルコ領クルディスタンから逃れてきて、イラク領クルディスタンに潜伏する反政府クルド人武装勢力PKK（クルド労働者党）秘密基地のルポやPKK幹部へのインタビューも含まれている。（福島2017：75-81)さらにトルコ領クルディスタンの村への取材に基づく、PKKに敵対するクルド人の「村落防衛隊」の村人へのインタビューも含まれている。

村落防衛隊は、トルコ政府がPKKゲリラ対策としてクルド人にクルド人を取り締まらせるべく、一家の農業収入より多いほどの給与と銃とを「志願する」村人に与えて創ったものだ。取材された村では、これまでに50人の村人がPKKに殺害されたが、一方でその村落防衛隊員の親戚を含む20人の若者が1990年代以後にPKKに加わったという。（福島2017：81-84）

PKKは、1984年に武装闘争を開始し、苛烈なトルコ政府の弾圧にもかかわらず、ソ連崩壊後も1998年のカリスマ的指導者オジャラン収監後も、断続的に武装闘争を継続し、トルコのみならずEUやアメリカからも「テロリスト」認定されてもまったく消滅の兆しを見せていない。村を見た同書の著者はPKK存続の理由を次のように指摘している。

　高校を卒業してもまともな就職口はなく、20歳を過ぎても失業状態の若者は喫茶店や道路脇にたむろする。このままでは結婚もおぼつかない。将来に絶望感を抱いた若者が、「不正義がはびこり、不公正な世界を打ち破るために戦おう」と訴えるPKKに身を託してしまう構図がある。（福島2017：84）

**＜武装闘争のエトスと禁欲的なエロス＞**

さらにPKKのイラク領クルディスタン側の秘密基地への取材の際の通訳を務めた先述の作家の息子に対しては、「PKKが30年以上も血みどろの武装闘争を続けてこられた理由」を尋ね、次のような興味深い答えを引き出している。

　　「恋愛はご法度とはいえ、若い男女が、クルド国家の樹立を夢見ながら一緒に暮らして戦う。きっと彼らは山での生活が楽しいんだよ」。（福島2017：81）

なおここで「恋愛はご法度」とは、「PKKの基地では恋愛が禁止されているが、恋仲になった隊員はいつでもPKKを離脱する自由がある」、というインタビューでのPKK幹部の発言を指す。またその幹部は、「世界中の支援者からの援助があるので、資金に困ることはない」とも語っている。（福島2017：80）

　同書の著者はPKKについて、「カルト系の宗教団体のようにも思える」という違和感を示しながらも、「インタビューの最中も、若い男女のゲリラ兵は庭の隅で肩に銃を担ぎながら、楽しそうに談笑していた」ことを思い出し、「楽しいから」PKKが続いてきたという通訳の説明にも「一理ある気がした」と書いている。（福島2017：81）

しかしシリア領クルディスタンのロジャヴァ革命で起こったことに照らしてみれば、筆者には、このクルド人通訳の説明は一理あるどころか、クルディスタンの社会革命を促す原動力の核心を突くもののように思える。PKKの系譜を引くPYD（民主統一党）が主導したロジャヴァ革命は、家父長制と貧困と民族差別に押しつぶされてきたクルドの若い男女にとっては、今は焼身自殺に向かうような禁欲的なエロスのエネルギーを社会変革のエトスに変換し、それを原動力ともする「楽しい」革命のように見えるからだ。同書の著者がロジャヴァ革命の取材をも行っていれば、そのような観察をしていたかもしれない。

**＜視野から落ちるロジャヴァ革命＞**

　しかし、残念ながら同書には、ロジャヴァ革命は視野に入っていない。それは同書だけの問題ではない。

　2019年1月に出版された『クルド人を知るための５５章』（山口編2019）は編者自身が「現時点での日本のクルド研究の一つの到達点」（山口編2019：８）とするように、歴史、地理、宗教、文化、現状分析、ヨーロッパや日本在住のコミュニティの動向まで含めて、クルド人とクルディスタンに関する全体像を提供するものだ。

そこでは、内戦期シリアのクルド人とシリア北部地域の動向について、シリア内戦に関して日本で最も詳細なデータベースを提供するとともに鋭い現状分析を行ってきた青山弘之氏が、シリア共和国成立以来のクルド人への制度的差別の系譜と民族主義運動の系譜とをこれまでの研究を基礎に整理し、そこで北シリアでのPYDの躍進と実効支配、2017年からの「北シリア民主連邦」自治政府樹立の動きと2018年1月のトルコ軍の侵攻と北西部の占領に触れている。（山口編2019：183₋184）さらに「オジャランとPKK」と題するコラムでは、ジャーナリストの勝又郁子氏がPKKの創設者のひとりであり1998年から獄中にあるオジャランの「民主的連邦」思想について触れており、「クルド主導で自治が行われているシリア北部」で「差別も権力もない社会で、小さなコミュニティからボトムアップ方式でつながるネットワーク」である「民主的連邦への模索」が進むとしている。（山口編2019：191）しかし、それ以上の記述はなく、他にロジャヴァ革命を扱った箇所はない。なぜだろうか。

　おそらくそれは、ロジャヴァ革命を、同じ時期にトルコ領クルディスタンでPKKが展開してトルコ政府に徹底的に鎮圧された自治区設立運動と同一視し、すぐに消滅する一時的現象と見る「あいまいな革命」論の発想に陥っていたためではないだろうか。この立場を明確に打ち出したのは、オランダの研究者の論文（Leezenberg 2016)であった。

**Ⅳ　「あいまいな革命」論が覆う西クルディスタンの花**

**＜「あいまいな革命」論文＞**

「民主的自己決定（democratic autonomy）のあいまいさ――トルコとロジャヴァにおけるクルド人運動」と題したその論文は、獄中で思想的転回を遂げたPKKの元指導者オジャランの著作の読解に基づき、トルコおよびシリア北部で2016年7月までにオジャランの思想の影響を受けて起こったことを考察したものだ。「民主的自己決定（democratic autonomy）」とは、オジャランの新しい思想の核心を示すものとして用いられている。同論文の結論部分の冒頭を引用しよう。

　　民主的自己決定は、トルコ国家のしたたかさ、さらにはPKK自身のレーニン主義的でスターリン主義的な遺産、この両者に対して取り組む試みのように見えるかもしれない。それはイデオロギーとしては、国家中心主義的で近代主義的な思考（state-centered and modernist thinking）から、リベラルかつ弁証法的な装いをとる（both in a liberal and dialectical guise）、コミュニティ中心主義的で歴史超越的な見通し(a communitarian and trans-historical vision)を支持する側への転換を示す。（Leezenberg 2016: 685)

英語で刊行されたオジャランの獄中の著作のみならず、オジャランがトルコ語訳で読んで大きな影響を受けたアメリカのソーシャル・エコロジーの思想家マレイ・ブクチンの著作（主著には邦訳もある）の原著をも検討した結果、社会主義的クルド国家の樹立を目指したマルクス＝レーニン主義を標榜する政党PKKの創設者のひとりの思想的転回が確認されている。それは、国家中心主義的近代主義からリベラルで弁証法的な装いのコミュニティ中心主義的歴史超越主義（それはエコ・フェミニズム的なコミュニティ中心主義と言った方が分かりやすい）への転換として特徴づけられている。

しかしこの論文の主眼は、むしろそのイデオロギーの実践的帰結に注意を促すことにある。すぐに続いて次の文章がある。

しかしながら、組織として見れば、それはPKKのレーニン主義的な過去とかなりの程度つながっていて、それに応じて暗黙のうちにではあるが、ブクチンやオジャランの理論的著作の中にあるアナーキズム的要素と矛盾している。それは実践としては、南東部トルコとロジャヴァでは、PKK側の諸組織による政治支配である。(同上)

つまり、国家中心主義を厳しく批判して、底辺のコミュニティでの全員参加の民主主義による自己決定（自律的なコミューンの連帯によるガバナンスを形成する連邦主義）を称揚する点でアナーキズム的な思想が、プロレタリア独裁国家を目指す官僚制的組織であったPKKの系譜を引く諸組織によって実践されるところに無理があるというのである。すぐに続いて、ロジャヴァ革命は次のように総括される。

とりわけロジャヴァでは、民主的自己決定の諸政策は、一党支配の形をとるまでになっていて、競合するクルド人の他政党の活動の余地はほとんどない。こうして、PYDは、厳格な構造を持つ党組織に基づき、強力な軍事部門と治安維持装置に支えられた、レーニン主義的な前衛を構成している。それはまた、PKKが持っていたオジャランへのスターリン主義的な個人崇拝（personality cult）を再生産している。これらの組織的諸特徴は、アナーキストとして底辺の組織を重視するブクチンの考え方とは対立するように見える。（同上）

ロジャヴァ革命は、PYD一党支配を実現しただけであって、底辺のコミュニティ組織の民主的自己決定を目指す諸政策は、絵にかいた餅、あるいは羊頭狗肉であった、というのである。

**＜「あいまいな革命」論文のねらい＞**

たしかにロジャヴァ革命に関する資料に頻出する革命支持者たちによるオジャランへの言及や画像に登場するオジャランの肖像は個人崇拝と、カルト的な信仰によってつながる党組織のネットワークの存在を示すかのごとくであり、筆者も強い違和感を覚える。また、この論文でも挙げられているように、アムネスティ・インターナショナルやヒューマン・ライツ・ウォッチのような著名な人権団体がロジャヴァ革命の中でのPYDによる人権侵害事件を報告している。（１）

だが、たとえ一党支配や個人崇拝のもとではあっても、ロジャヴァ革命が導入した諸政策――住民コミュニティ組織およびエスニシティや宗派別コミュニティにおける直接民主主義的自己決定を基礎とする連邦主義的結合の制度化、軍や警察を含むあらゆる行政組織での男女の二重代表制の導入など――が、この地域の住民生活に大きな変化をもたらしたとすれば、それは、一党支配や個人崇拝を吹き飛ばし、人権侵害事件を引き起こすような構造的要因を解消させる、社会的な力を生み出すかもしれない。

　オジャランの思想的転回とその社会的影響に焦点を当てるこの論文は、続けて次のように結論づけている。

しかしこのことは必ずしも、民主的自己決定すなわち連邦主義（confederalism）が宣伝文句にすぎないとか、大がかりな理論構築はそれがミクロレベルで実践されるやいなや変化するものだなどと言うのではない。そうではなく、民主的自己決定というイデオロギーそれ自身の中のあいまいさと沈黙、とりわけ党組織や、武力を用いる自己防衛、現存国家の正統性に関するあいまいさと沈黙とが、アナーキズム的読み方とレーニン主義的読み方、さらに平和的な読み方と武装闘争的な読み方との両方を許す余地を与えてしまっているというべきだろう。（同上）

つまり、獄中のオジャランの著作は、旧来のレーニン主義的武装闘争から新しいアナーキズム的非武装闘争への思想的転回を示すが、トルコでのPKK、そしてシリアでのPYDの活動を見れば、オジャランの著作は旧来のレーニン主義的武装闘争の継続を促すものとして解釈されている。したがって、オジャランの思想的転回は、あいまいで、不十分だというのである。

　ここからは、獄中のオジャランの思想も、ロジャヴァ革命も、あいまいな思想から生まれたあいまいな革命であって、注目に値するものではないという結論が導き出されることになろう。（２）

**＜効きすぎた薬＞**

　とはいえこの「あいまいな革命」論文は、オジャランの民主的自己決定の思想が、「PYDとPKKによって実践」されたことで、「実際に人々を解放し、自由にする効きめ（real emancipatory effects）」をもたらしたことは否定できないとしている。とりわけ「女性のエンパワーメント」は、「将来のどんな環境のもとでももはや後戻りできないかに見える成果」（同上）だとまで言う。

　この言明は、極めて重大なものだ。もはや後戻りできないほどに、実際に人々を解放して自由にする効きめがあった、ということは、不可逆的な社会システムの構造転換、すなわち社会革命を意味するからだ。ついでに言えば、ここでオジャランの思想を実践して社会革命を引き起こした主体にトルコで活動するPKKを含めるのは不正確だろう。PYDが活動するシリアと違ってトルコでは、地域社会規模で全面的に実践される前に弾圧されてしまったからだ。この点での社会システムの構造転換に関するシリアとトルコの違いは、さらに経済、政治、軍事に関わる社会的なパワーの配置に影響するものと考えねばならず、だからこそ、筆者を含む多くの人々がロジャヴァ革命に注目しているのである。

ともあれ、この論文の末尾は、とりわけ女性のエンパワーメントに関する社会革命の達成を指摘する重大な言明にもかかわらず、オジャランの思想的転回が、トルコでの民主的自己決定を求めるPKKの武装闘争への転換を引き起こし、それがトルコ政府による弾圧政策への転換――それはクルド系合法政党までをも含めた徹底的なものとなった――を引き起こして、トルコの民主化の展望を台無しにしたことを強調して終わっている。

　この点から見れば、どうやらこの論文の著者は、トルコの民主化にもっとも関心を抱いているらしく思える。獄中のオジャランの思想的転回とシリア内戦でのPYDの軍事的・政治的成功に啓発されて、PKKがトルコで再開することになった武装闘争に対して、警鐘を鳴らすことがこの論文の基本的なモチーフになっているように思える。獄中のオジャランが発した民主的自己決定の美辞麗句は、トルコでは過酷な弾圧による悲惨な内戦状態の鎮圧をもたらし、クルド系合法政党による選挙戦を通じる民主化の試みの進展（過去のこの苦闘については、たとえば『レイラ・ザーナ』（中川他編2006）というクルド系女性議員の記録を見よ）を閉ざす結果になった。「地獄への道は善き意図で敷き詰められている」ものだ。オジャランの新しい思想や、シリア内戦でのロジャヴァ革命を賛美する者（論文ではロジャヴァ革命への連帯を呼びかけるグレーバーの『オブザーバー』紙への論説（Graeber 2014）を始め多くの文献が挙げられている）は、トルコの苦い現実を見よ！という叫びとして、口に苦い良薬として処方されたのがこの論文であったように思える。

　だがこの良薬は、ロジャヴァ革命への賛美をほとんど食したことのない人の多い日本などでは効きすぎて、ロジャヴァ革命への関心そのものまでをも奪ってしまったように思える。生まれたばかりの社会革命の赤ん坊への関心は、この論文の著者にとっても、無批判、無防備な賛美を洗い落とすための盥の水といっしょに、流されてしまったのではないだろうか。

　PKKの活動家たちの間での討論を受けて、オジャランが獄中から蒔いた種は、トルコではつぼみをつけただけでたやすくむしられてしまったかもしれない。しかし、シリア北部、ロジャヴァでは、アラブの春が作り出した稀有な条件の中で、大きな花を咲かせた。2016年7月4日に編集委員会に受理された上述の「あいまいな革命」論文の著者が参照できなかった多くの文献の中で、ロジャヴァでの社会革命の花は、中東だけでなく、人類社会全体にとっての貴重な財産となりつつある。

**Ⅴ　おわりに――花を結実させ、種を散らすために**

**＜ロジャヴァ革命を知るための資料＞**

 西クルディスタンの花が実をつけ、その種を散らして世界を花で埋めるようにするのは、同時代に生きるわれわれの使命である。日本政府を通じて国際協力の名のもとにクルディスタンの人々を抑圧するトルコ、シリア、イラク、イラン各国政府の開発政策を支えてきた日本に住む人々にとっては、それは自らの行状を振り返ることでもあり、人間的義務でもある。（日本のこの地域への国際協力について、坂本・岡野内・山中編2021参照）

　そこで最後に、危機的状況にある進行中のロジャヴァ革命について知るための資料について、読書案内ふうに、ごく簡単な解説を試みる。最初に2019年末と2020年3月に刊行された日本語訳の2冊を、続いて2018年あたりから続々と刊行され始めた英語の研究書について、最後に現在も次々に英語で刊行中のオジャランの著作について触れよう。

**＜東クルディスタン出身の革命軍兵士の回想録＞**

東クルディスタン出身の革命軍兵士の回想録が邦訳されている。『この指がISから街を守った――クルド人スナイパーの手記』（Cudi 2019=2019）がそれである。ロジャヴァ革命が置かれた歴史的状況を理解するには、まずこれを読むことをお勧めしたい。

同書のおもしろさは、第一に、著者がイラン領クルディスタン（東クルディスタン）の出身であるために、イランにおけるクルド人の状況を知ることができることにある。著者は、イラク国境から歩いて4時間のクルド人の村で1984年に生まれた。3歳の時に村の市場に落とされたイラク側の毒ガス弾や庭先に父が掘った防空壕などイラン・イラク戦争の記憶、父親と殴り合いをするほど誇り高かったという母のこと、クルド語ではなくよくわからないペルシャ語で進められる小学校教育の場での疎外感、ムスリムではあるが断食月の日中に焼肉とワインの会食をして笑いながら子どもにも勧める家族の宗教生活、イランの反体制クルド人組織コマラに参加しながらもその武装組織はつまらないと言っていたという幼なじみの友人のこと。大学入学資格を得ても家計が貧しいためにあきらめ、二年間の兵役義務に応じたこと、マハーバード近郊での三カ月の訓練、イラクとトルコとの国境地帯でのイラン人の隊長にほぼ同じ村出身のクルド人ばかりの部隊への配属。敵はPKKのクルド人だからクルド人どうしが戦わされる、軍の給料はもらっても魂は売るな、隊長を信用するなと語るクルド人上官。実際のPKK野営地攻撃でクルド人を撃つことへの反発から軍隊を脱走し、イランを離れたくないためにPKKには参加せずにコマラに加わっていた幼なじみの友人のいたマハーバードの街で1年以上ともに活動したこと。その友人が当局のブラックリストに載り、治安組織が実家にも捜索に来たことを聞いて国外脱出を決意したことなど、貴重な観察や体験談が得られる。

　第二に、著者はマハーバードの密入国斡旋業者に7,500ドル（カナダに住む父の友人から業者へ頭金を送金してもらうなどその調達方法も興味深い）を払い、イランから山を越えてトルコ経由でヨーロッパに密入国し、イギリスで難民申請をして認められ、さまざまの職業を経験し、イギリス人のガールフレンドを持ち、…おそらく典型的なヨーロッパのクルド難民の生活を経験しており、それが当事者の語りで記されている。

　第三に、ロジャヴァから見ればよそ者である志願兵の眼で、ロジャヴァの戦場と戦闘の状況が描かれていることだ。女性部隊の隊長は男性部隊に命令できるが、逆は禁じられているというロジャヴァ女性革命の原則、そもそも命令はなく提案があるだけだという革命軍の仕組みや狙撃兵としての日常、銃の照準を合わせて殺したIS兵士のこと、さらにISの残虐さに義憤を感じてアメリカ、ドイツ、イギリス、ハンガリーなどからも参加してきた非クルド系の志願兵の描写もおもしろい。

　第四に、著者は、ヨーロッパの難民暮らしの中でインターネットの英語版でオジャランの著作を読み、それに深く共鳴して志願兵としてロジャヴァに参加しているため、自らの生い立ちからロジャヴァ革命に至るまでを、オジャランが示唆したと思われる枠組みで語っていることだ。それによって、国民国家、資本主義、家父長制を相対化して乗り越えようとするオジャランの思想が土着化して受容される仕方を知ることができる。

　もとより同書は、周到に編集されて出版された回想録であり、歴史資料としてはその点に留意して批判的に読む必要がある。それにもかかわらず、以上の理由に加えて、古今の戦場文学の名作に匹敵するほど、同書は文学作品として十分におもしろい。

**＜ドイツの革命支援団体の研究者たちによる現地調査に基づく分析＞**

　上述の革命軍兵士回想録はもちろん、ロジャヴァ革命の全体像を描こうとするものではない。社会革命としてのロジャヴァ革命の全体像を示そうとする試みは、ドイツのロジャヴァ革命支援団体の研究者たちによって行われた。2014年5月の現地調査に基づいて2015年3月にドイツ語で刊行されたものが、さらに2016年初めの二度目の調査に基づいて2016年５月にその後の情報を含む英語版として刊行された。その日本語訳が『女たちの中東 ロジャヴァの革命――民主的自治とジェンダーの平等』（Knapp et al. 2016=2020）である。なお邦訳本では、戦場となったロジャヴァの国境地帯から30万人の避難民を出した2019年10月のトルコ軍のロジャヴァ侵略と主要都市占領から2020年1月末までのロジャヴァ革命の危機的状況について、インターネットで得られる文書および映像資料を丹念に追って作成された解説も収録されている。（松田2020）

　この本のメリットは何よりも総合的な枠組みにある。歴史・文化的な背景から、PKKの概略と方針転換、シリア内戦での革命の経緯、そして女性革命、直接民主主義を制度化する民主主義的自治（民主的自己決定）の仕組みと市民社会の組織化、有名な女性防衛隊を含む軍事組織の構造、司法制度と治安警察組織、教育、保健、バース党政権によるこの地域の国内植民地化からの解放をめざす経済政策と協同組合の組織化、シリア唯一の油田地帯での採掘問題を含む環境問題、近隣諸国やISを含む武装勢力の配置と動向、原著出版の2016年時点での展望が15の章にわたって記されている。駆け足の調査での聞き取りと観察に基づくものが多く、内容的に薄い項目もあるが、かなり詳細な注記があるので、逆に未解明の問題や研究課題が明確になる。

　本稿の第Ⅰ章に引用したグレーバーの序文（Graeber 2016=2020)は、ロジャヴァ革命に批判的なイギリスの左翼運動への痛烈な批判を含む点でもおもしろいが、ロジャヴァ革命の課題に関する鋭い観察も記されているので、要約して紹介しておこう。彼が1週間ほどの現地訪問を終えて帰途につく直前に、置き土産としてロジャヴァ革命への批判を望む現地活動家たちの求めに応じて語った論点とされる次の三つの論点がそれである。

①階級の問題――政府や政府と同盟する支配階級が逃亡したために革命は深刻な階級闘争に直面することがなく、女性への抑圧との闘争ばかりが議論されているが、リーダー層の固定化による新しい支配階級の形成を防ぐ戦略が必要ではないか。

②時間の問題――底辺のコミューンと機能別委員会の二つの会合が決定機関となる直接民主主義の仕組みとなっているので、底辺レベルより広域の地区やさらに広域の地域の集まりに出る人は、最大で六つの会合に出席することになる。膨大な時間を取られることへの対策が必要ではないか。

③トップダウンとボトムアップの構造を統合する問題――住民による直接民主主義的ボトムアップを尊重する革命後の裁判制度が伝統的なものとなったため、国際的人権基準を充たさないとして国際的非難を浴び、医薬品や武器の禁輸措置を課されて革命維持が危うくなる事件があった。このような事件を避けるためには、トップダウンで国際基準に合わせる仕組みが必要ではないか。（Graeber 2016=2020: 23-27)

　いずれも難問であり、このような問題そのものを全員で議論しながら共有する公共圏を創り出すことによってのみ解決できる問題と言えよう。

**＜欧米などの研究者による現地聞き取り調査に基づく研究＞**

　ロジャヴァ革命に関して日本語で読めるものは以上2冊だが、英語ではいくつかある。

　まず、シリア内戦後のシリア北部に関する「英語による最初の研究書」とされているのがいずれもイギリスの大学院でクルド研究によって学位を取った研究者・コンサルタント及びイラク在住のジャーナリストの共著であるAllsopp & Wilgenburg (2019)である。多くはオンラインで入手できる2016年までに刊行された論文や本などの刊行資料（大部分は英語で、フランス語、アラビア語のものも含むが、ドイツ語は含まれない）、人権団体やNGOやシンクタンクなどのオンライン報告書などの資料、やはりすべてオンラインでアクセスできるロジャヴァの行政機関、PYDなどの政党、シリア政府資料、そして、2017年6月までに行われた広範な関係者へのインタビュー（匿名も含む）に基づくものだ。『シリア北部のクルド人――ガヴァナンス、多様性、紛争』というタイトルが示すように、焦点はロジャヴァ革命政権の統治構造の記述に向けられている。先述のKnapp et al.（2016=2020）の情報を、それ以後のより広範な調査に基づいて補正するものとして貴重である。

　さらにオーストリアのクルド学・政治学研究者によるSchmidinger (2018); (2019)にも触れておきたい。それらは少なからぬクルド研究の蓄積を持つドイツ語文献とやはり広範な関係者へのインタビューからなるロジャヴァ革命に焦点を当てた労作である。Schmidinger (2018)は、ドイツ語初版2014年が第四版まで、2015年のトルコ語訳が第二版まで、さらにクルド語（ソラーニー方言）やスペイン語でも翻訳が進行中とされおり、2015年にはロジャヴァでジャーナリスト賞を受賞した本である。この英語版は、さらに2018年初頭までのインタビューを加えた改訂版となっている。その第2章は、戦争に関する社会科学的調査の方法に関する章となっていて、丸抱え報道が問題であるのと同じく、丸抱え調査の危険性への自覚の重要性が力説されており、そのような客観的叙述に務める姿勢が高い評価を生んだものと思われる。後半のインタビュー集は、ほとんど解説を含まない問答集の様相を呈しているが、人権侵害問題などの具体的な問題について食い下がるとともに、自らのヒューマニスティックな連帯的介入を求める自らの実践的立場をもさらけ出す著者の質問もいっしょに収録しされているために、実におもしろい。Schmidinger (2019)は、同じ著者がトルコ軍主導のシリア北西部のアフリ―ン侵略・占領に焦点を当てて「エスニック・クレンジング」の実態を解明しようとする貴重なものだ。

**＜トルコ領クルディスタン出身の革命家オジャランによる獄中の著作＞**

　最後にオジャランの著作についてかんたんに触れておこう。本稿の冒頭で触れたように、International Initiative ‘Freedom for Abdullah Öcalan- Peace In Kurdistan’ (2020)に収録された著名な理論家たちの文章は、英語やドイツ語などで出版されたオジャランの著作への序文として書かれたものが多い。同書の長大な著者名（「オジャランに自由を、クルディスタンに平和を！」国際行動）が示すように、これらの理論家を動員した出版戦略じたいが、オジャラン釈放とクルディスタンの民主化をグローバルな公共圏に向けて訴えるクルディスタン民主化・解放運動戦略の一環になっていると言っていいだろう。

寄稿した理論家たちは、もちろんそれを百も承知で、しかも単なる人道的な見地からだけではなく、オジャランの著作に理論的な興味を示し、それぞれの関心からしばしば突っ込んだコメントをしている。したがって、オジャランを論じるには、さまざまの検閲から自由ではない獄中にあって書かれたオジャランを取り巻くコンテクストとともに、オジャランの著作とされるテクストを読解するだけでなく、これらの理論家たちのオジャラン論をも視野に入れておく必要があろう。

オジャランの思想の概要を知るには、ロンドン大学SOASでジェンダー論を教えるナ―ディヤ・アル・アリー教授による興味深い序文を付したÖcalan (2017)が便利である。Cudi(2019=2019)の著者が書くように、世界に散らばるディアスポラのクルド人たちは、インターネットからオジャランの英語の著作を読んでいるようだ。英語で出版された十数冊になるオジャランの著作目録は、International Initiative ‘Freedom for Abdullah Öcalan- Peace In Kurdistan’ (2020)：281-282にも収録されている。

　壮大な歴史的視野でパレスチナ問題やクルド問題などの中東の諸問題と人類史への展望を示そうとするオジャランの問題提起については、ロジャヴァ革命に関する研究と併せて別稿で検討したい。

**注**

（１）ドイツの革命支援団体による現地調査に基づく本では、これらのロジャヴァ革命のもとでの人権侵害事件は、ロジャヴァでも「深刻な人権侵害」として認定されたうえで、「過去の過ち」として克服の努力が行われているとされている。（Knapp, et al. 2016；35 ）国際人権団体の報告書はそれじたい、貴重な資料であり、Allsopp & Wilgenburg (2019)はそれらを系統的に用いており、同書の文献目録にはそれらのリストがある。

（２）トルコ政治研究者による（2017）はこの論文を注記しつつ、その立場を踏襲しているかに見える。その後の論文、たとえば間（2019）でも、PYDとPKKが関わる社会運動を一体化したものとみて地域差を捨象する視点は維持されている。これに対し、より国際関係の視点からトルコ政治を研究する今井（2018）は、PYDとPKKの違いに留意しつつ、獄中のオジャランの著作の自治構想を具体化しようとするものとしてシリア北部のPYD実効支配地域の統治システムを紹介している。もっとも、「主権の空白地」の国際比較という同論文の課題に制約されてか、PKKがトルコで推進して弾圧されたオジャランの自治構想に基づく自治区設定運動、さらにロジャヴァでのジェンダーやエスニシティの差異に応じた直接民主主義的な制度導入のようなロジャヴァ革命の社会革命的な側面については触れられていない。

**参照文献**

Allsopp, Harriet & Wladimir van Wilgenburg (2019) *The Kurds of Northern Syria, Governance, Diversity and Conflicts*, I.B. Tauris : London, etc.

Cain, Sian (2020)“David Graeber, anthropologist and author of Bullshit Jobs, dies aged 59”. *The Guardian*, September 3, 2020. (<https://www.theguardian.com/books/2020/sep/03/david-graeber-anthropologist-and-author-of-bullshit-jobs-dies-aged-59> ：2021年3月1日閲覧）

Cudi, Azad (2019) *Long Shot: My Life As a Sniper in the Fight Against ISIS,* W&N: London. (アザド・クディ著、上野元美訳、2019『この指がＩＳから街を守った―クルド人スナイパーの手記』光文社．)

福島利之（2017）『クルド人　国なき民族の年代記――老作家と息子が生きた時代』岩波書店．

Graeber, David（2014）”Why is the world ignoring the revolutionary Kurds in Syria?” *The Guardian*, October 8, 2014. ( <https://www.theguardian.com/commentisfree/2014/oct/08/why-world-ignoringrevolutionary-kurds-syria-isis> ：2021年3月1日閲覧）

――――, (2016=2020) “Introduction,” in Knapp et al. (2016=2020) :13-28.

Hardt, Michael & Antonio Negri (2017) *Assembly*, New York: Oxford University Press.

 （2017）「PKK勢力はなぜクルディスタン自治政府住民投票に反対したのか」『クルド問題についての緊急レポート』（日本貿易振興機構アジア経済研究所）：1₋8.（<http://hdl.handle.net/2344/00049722>：2021年3月1日閲覧）

――――（2019）「トルコのシリア侵攻――誤算と打算」『世界を見る眼＜IDEスクエア』2019年10月（<http://hdl.handle.net/2344/00051495>：2021年3月1日閲覧）

今井宏平（2018）「「主権の空白地」の統治をめぐるせめぎ合い――イラクとシリアにおける「イスラーム国」とクルド人組織の活動を事例として」『国際政治』194：46-61.

International Initiative ‘Freedom for Abdullah Öcalan- Peace In Kurdistan’ (2020) *Building Free Life; Dialogues with Öcalan*, PM Press: Oakland, CA.

勝又郁子（2019）「遠のいた独立――住民投票が否定されるまで」山口編（2019：241-245）．

Knapp, Michael, Anja Flach, and Ercan Ayboga (2016) *Revolution in Rojava: Democratic Autonomy and Women's Liberation in Syrian Kurdistan*, Pluto　Press: London.（山梨彰訳、2020『女たちの中東 ロジャヴァの革命――民主的自治とジェンダーの平等』青土社．）

Leezenberg, Michiel (2016) “The Ambiguities of Democratic Autonomy: The Kurdish movement in Turkey and Rojava,” *Southeast European and Black Sea Studies*, 16(4), 671-690.(<https://doi.org/10.1080/14683857.2016.1246529> : 2021年3月1日閲覧）

Mahmoud, Houzan (2021) *Kurdish Women’s Stories*, Pluto Press: London.

松田博公（2020）「ネヴァー・エンディング・レヴォリューション」Knapp et al. (2016=2020): 399-430所収．

中川喜与志、大倉幸宏、武田歩編（2006）『レイラ・ザーナ――クルド人女性国会議員の闘い』新泉社．

Öcalan, Abdullah (2017) *The Political Thought of Abdullah Öcalan; Kurdistan, Woman’s Revolution and Democratic Confederalism*, ( Translated by Havin Guneser and International Initiative ‘Freedom for Abdullah Öcalan- Peace In Kurdistan’, Pluto Press: London.

岡野内正（2020）「コロナ・パンデミック後の地球防衛戦争」『アジア・アフリカ研究』60（3）；（4）：1-26; 1-24.

――――（2021）『グローバル・ベーシック・インカム構想の射程――批判開発学およびSDGsとの対話』法律文化社．（印刷中）

坂本公美子・岡野内正・山中達也編（2021）『日本の国際協力　中東・アフリカ編』ミネルヴァ書房．（印刷中）

Schmidinger, Thomas（2018）*Rojava: Revolution, War and the Future of Syria's Kurds*, Pluto Press: London.

――――, (2019) *The Battle for the Mountain of the Kurds: Self-Determination and Ethnic Cleansing in the Afrin Region of Rojava*, PM Press, Oakland, CA.

Üstündağ, Nazan (2016) “Self-Defense as a Revolutionary Practice in Rojava, or How to Unmake the State,” *South Atlantic Quarterly*, 115(1): 197-210.

山口昭彦編著（2019）『クルド人を知るための５５章』明石書店．

山中達也（2019）「革命期チュニジアにおける若年層失業問題」『アジア・アフリカ研究』 59(2), 1-27.

（おかのうち　ただし、会員、法政大学社会学部教授）

**Did the Arab Spring Make Flowers Bloom in West Kurdistan?**

**: For Research on Rojava Revolution in the Syrian Civil War**

**OKANOUCHI Tadashi\***

Rojava Revolution in the Syrian Civil War since 2011 has been relatively neglected by most of Japanese researchers including Middle East specialists, although some prominent foreign scholars, e.g. Antonio Negri, John Holloway, David Graeber, etc., have been very much attracted by the revolution and the thought of its ideological leader, Abdullah Ocalan.

The reason of such neglect seems to rely on conventional wisdom about Kurdish problem, i.e. it is a “tragedy of a nation without state”, and prejudice about PKK, i.e. an outdated militant Marxist party or a terrorist organization. Moreover, an influential article in Japan, i.e. Leezenberg, Michiel (2016) “The Ambiguities of Democratic Autonomy: The Kurdish movement in Turkey and Rojava,” had paved the way to see the Rojava Revolution as an ambiguous revolution lead by Leninist party with Stalinist personality cult around Ocalan.

However, a Japanese journalist’s book on Iraqi Kurdistan and Turkish Kurdistan, i.e. Fukushima(2017), clearly shows that non-democratic Kurdish nation-state is not a solution, and that poverty in Turkish Kurdistan makes PKK sustainable.

Therefore, Japanese audience will be able to appreciate the significance of Rojava revolution based on anarchist, feminist, and ecologist ideology lead by a sister party of PKK and Ocalan in the context of Kurdish history, consulting with some newly translated books on Rojava revolution, i.e. Cudi(2019=2019) and Knapp et al. (2016=2020).

\*AAIJ member,

Professor, HOSEI University